

近藤忠義さんを偲ぶ

野田, 壽雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

1980-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019274>

のかも知れない。ただ、この知恵おくれの子にとっては、自分が事に当って迷うとき、まず思い出すのは「近藤さんならどうなさるだろうか」ということであった。そしてそのたびごとに何とか「まっとうな人間」にとどまることができたのは、ひとえに近藤さんのお蔭であった。「純粹神に近いお人」と、私は小著（平安時代物語論考）のあとがきの中で、近藤さんのことに触れたことがあったが、そのあとで近藤さんにお会いするなり、「とうとうあなたに神さまにされちゃった」と破顔一笑されたのを思い出す。実際、私にとっては、「神」の真実が、至誠が、近藤さんそのものであった。

こうして、私は近藤さんから与えられるばかりで、こちらからはおこたえする何物もなくて終ってしまったのを悔いているが、所詮こちらは何も持ち合わせていないのだから、どうしようもなかったのである。近藤さんにおわび申し上げるばかりである。

ただ一つだけ付け加えさせて頂く。はからずも『御遺著』となった「日本古典の内と外」は、お親しい方々やお弟子方が、気のすままない近藤さんを極力そのかし申し上げてその気におさせした結果、集め得られた論説集であるが、ふとしたことで、その出版については、私の親しい友人の経営する笠間書院の池田猛雄氏に任せて頂いた。誠実な池田氏は、製本も特に堅牢な、がっちりした立派なものを作ってくれたが、ただ読者の一部には、それを独立の記念出版物としないで、「笠間叢書」の一冊に加えた形で公刊したことを不審とされる向きもあると聞く。

ご尤もお疑いなのだが、実は笠間書院は極めて良心的な小出版社であるだけに、文部省出版助成金による出版物（これは「叢書」に加えることを禁じられている）のように当面「売れなくてもよい」ものは別として、一般の「かたい」単行出版物は、たいていの小売店では店頭飾ってくれないので、せめて「叢書」の形にでもして、大きな小売店で「『叢書』であるが故に店頭並べてくれる」の望みをかけるより手はないのである。池田氏は、近藤さんの折角の御本を、なるべく売れるようにしたいと切願した。その結果がこうなのであった。御諒解頂きたい。

（学習院大学名誉教授）

近藤忠義さんを偲ぶ

野田 壽雄

昭和十年（一九三五年）、当時まだ不況の嵐が収まっていなかったころ、東京帝大国文科卒業で近世文学を専攻した方々が、「近世文学会」というグループを作った。中心は、藤崎一史・水野稔・中島

武雄・頼桃三郎の諸氏で、このグループは月一回の研究発表会を開くほかに、「近世文学」という雑誌を発行した。昭和十年五月の創刊号の末尾に、会員名簿が載せてあるが、会員数は十六名で、その中に近藤忠義さんの名も見えている。この「近世文学」は昭和十三年八月の第四巻第四号(通巻二十号)まで続いたが、その後は前年の日華事変の勃発で物資統制が始まり、印刷難に陥って自然廃刊になってしまった。ただし、その最後の号の末尾にある会員名簿を見ると、会員数はすでに四十五名に達している。

私が入会したのは、昭和十一年であったが、大変楽しい会で、月一回本郷森永の二階あたりでコーヒーにケーキという簡素なものを食べながら、会員の発表を聴いたり議論をしたり、雑誌の発行計画をしたりしたものであった。私が大先輩の近藤さんと知り合ったのも、この会がきっかけであった。そのころ近藤さんは、国文学界の歴史社会学派のリーダーとして、颯爽とした構えを見せていたが、その姿は頼もしく、若気の至りでやはり国文学の新風を望んでいた私などには、あこがれの輝かしい存在であった。しかし時局はきびしく、いわゆる赤追放の目があちこちに光っていて、近藤さん自身もよく会合の席上で「僕には尾行が付いているかも知れない」とか、「この部屋にもそのうち盗聴器が取り付けられますよ」と冗談のように言っていて笑っておられた。戦争中歿った藤田徳太郎氏も、近世文学会創立以来の会員であったが、二人がかち合うと必ず激論になり、まわりの者がハラハラしたが、しまいには「近藤が来ている

か。それじゃ帰る」「藤田が居るか。それじゃ遠慮する」という仲にまで発展して、そういうことが近世文学会解消の一つのきっかけになったことも事実である。

こういう学問的には頑固である近藤さんも、私生活においてはなかなかダンディであった。銀ブラが好きで、銀座ではよくお会いした。会えば銀座裏の「いな舟」という小料理屋に連れてゆかれ、そこで学問論議・政治論議を聞かされる。私はますます近藤さんに惚れ、大いに教えられたものだった。

戦後間もなく、私は北海道に渡ることになり、あまりお目にかかる機会も無くなったが、しかし日本文学協会の学会では必ずお会いできた。あるとき、北海道から上京した私に近付いて来られ、「藤村(作)先生が君に会いたがっておられるよ」と言われた。そのころ藤村先生は病臥しておられ、面会謝絶ということで、私も遠慮申し上げていたのだが、近藤さんの「これから家にいらっしゃい」という言葉に励まされて、近藤さんに付いて行った。近藤さんは当時藤村先生のお宅に同居していたのである。しかし、夜だったので、明日の朝藤村先生とお会いするということになって、その夜は凶々しくも藤村先生のお宅に泊めていただいた。二階の広い先生の書齋に独り寝て、近藤さんの好意に感謝しつつ、また明日の朝に心躍らせながら、その夜はあまり寝つかれなかったことを覚えている。そして翌日久々に藤村先生の温顔に接することができた。先生はやはり近世文学の話ばかりなされ、最後に頼むというようなことを言われ

た。お会いしたのは三十分ばかりだったけれども、それが先生にお会いした最後になった。半年ほどのち、藤村先生は他界されたのである。

近藤さんの好意が無ければ、おそらく上述の千載一遇の機は無かつたであろう。私は、藤村先生といい、近藤さんといい、恵まれた恩師を持った。その感激は一生忘れられないけれども、それにしても今まで両恩師の御期待に対し十分の一もお返しできなかったことを恥ずかしいと思う。もう一度奮発しなければと思うこと、しばしばである。

(青山学院大学教授)

老年の楽しみ

——近藤さんの思い出

水野 稔

昭和八年の夏ごろ、本郷駒込林町に住んだころから、私は向ヶ丘弥生町の近藤さん（氏はこのよびかたをわれわれ後輩に要求された）の

お宅へ時どきお邪魔させていただいた。そしてしばしば本郷通りの喫茶店や、時には浅草の焼鳥屋などにも連れていただいた。そういう時は絶対に学問の話は避けて、くだけたやわらかい話題ばかりだった。私が半島の舞姫、崔承喜の名も知らないもので、ずいぶん疎いね、勉強ばかりじゃだめですよ、などと笑われたのも、そういう折だったと思う。

だがそうしたとりとめのない雑談のなかに、近藤さんの人がらばかりでなく、その学問のありかたや研究者としての姿勢をも感じることができたような気がする。知らず知らずのうちに影響も受けたことも事実である。芝居のはなしでも趣味や好事にわたることは、極度に戒めておられた。しかもほんとうは芸の世界に心から浸って堪能しようとする人だった。晩年に見せられた鶴沢寛治への傾倒などはそのあらわれだったのだろう。今から思えば、そこには近藤さんらしい学問上の苦悩とその超克の努力というようなものが、きびしく存在したに違いない。

私が戦時中、藤村先生や近藤さんとも深い縁故のあった先輩の要請で陸軍の教官となったとき、近藤さんは「軍の教育は大切です」とかなりきびしい語調でいわれた。その意味も十分にわかっているが、結局私自身は恥ずかしくも保身に汲々とし、しかも研究の阻止されるような形勢を泣言で近藤さんに訴え、かえって慰められるようなこともあった。

戦後私が郷里姫路に数年間退いていたとき、たまたま土地の新制